

# 風の祭祀と海の祭祀

田上 善夫

Wind Festival and Marine Festival

Yoshio TAGAMI

E-mail: tagami@edu.u-toyama.ac.jp

## Abstract

In this study, Yondunkut, the wind festival, in Cheju Island is investigated. Mainly investigated are wind festivals being carried out currently and the farewell festival of Chirumoridan Yondunkut, among others. Moreover, their relation with the former ones, and those of the southern Korean Peninsula are investigated. Furthermore, the meaning of the wind festival and that of the god of the wind in Yondunkut are examined. The main results are as follows; 1. Flags having god names are hung out in the Chirumoridan Yondunkut farewell festival. The most numerous are Yondunshin, the god of the wind, next Yonwanshin, the god of the sea, and then, Bonhyanshin, the god of the land. 2. This festival is performed from the morning till the evening. Many gods are invited during the morning and unified Yonwanshin and Yondunshin are deified in the afternoon, and after that, Yongamshin is sent and the festival is closed. The server of the festival is Shinban in the morning, Somi in the afternoon, and Shinban, who changed clothes, in the evening again. 3. Yondunkuts of various parts of Cheju Island are performed in February (lunar-calendar) and the contents are similar. They are performed mainly in the villages of the coastal area and the woman divers participate. 4. There are the traditions of Yongdunharumane, the grand-mother goddess of wind, in the southern Korean Peninsula. In Yondunkut held in February (lunar-calendar), a pole is stood and clean water will be offered. The pole expresses a rice plant, lets a bird play on it and prevents damage; it is to pray for good harvest. 5. The name 'Yongdun' originates in the same name 'Yondun' performed in China at the lunar New Year. Although it was a fire festival on New Year the 15th in the Korean Peninsula too, the late was changed to February the 15th at 1011, and further changed to April the 8th at 1352. 6. When the festival day was changed to February, the meaning of fire decreased as an element of the festival. Instead, as a festival for, the meaning of wind and water increased and it is thought that in Cheju Island it became the wind festival. The pole ceremony in the festival is handed down in Cheju Island, too. 7. In Cheju Island, coastal fishing and diving fishery are important occupations, and Yonwanshin, the god of the sea, is deified. The faith in wind god and that in sea god became united in the pray for good harvest.

キーワード：風祭, 風神, 済州島, ヨンドンクッ

keywords : Wind Festival, God of Wind, Cheju Island, Yondunkut

## I はじめに

風の祭祀は広域にみられ、その起源は古代以前に溯り、各地で変容を経てきたものと考えられる。越中八尾のおわら風の盆も、その流れの一つにある。全国の二千余の風の祭祀には、地域的な違いがみられ、およそ中部地方の信濃、近畿地方の大和、九州地方の豊後を中心とし、それぞれ影響しあいながら変容したものとみられる(田上善夫, 2010, 2012)。

風の祭祀にある地域的な違いは、その地域における生業の違い、すなわち狩猟的、農耕的、漁労的などの差異にもとづいて受容、展開されたことによる

と考えられる。その中で漁労的な要素は、海岸さらに海洋で行われるために、より広域的に展開したことが考えられる。それは沿岸地域の神社の由緒書に、外来神が多く記されることにもうかがえる。

風の祭祀に限らず多くの祭祀で、神事の齋行に引き続いて諸行事が奉納される。奉納行事には後世に付け加えられ、神事とは直接の関わりのないものもあるため、祭祀の性格が不詳となることも多い。とくに地域の主たる生業の変化、また仏教、儒教、道教などの外来宗教の影響などから、神事、祝詞、由緒書などにせよ、祭祀の意味が必ずしも明らかでないことが多い。

ここで小さな集落や、さらに個々の家ごとに行われる祭りでは、後世の影響や変容が少ないことがある。また修験などのように、様式には外来宗教の影響を受けても、本来の性格が伝えられるものもみられる。同様に巫、覡、祝などの行う巫儀、巫道などにも古来の性格が遺されることがあると考えられる。現在の風の祭祀は、さまざまな変容を受けているにせよ、そうした地方的、また末端における祭祀においては、比較的旧来の姿が遺されていると考えられる。それらに含まれる要因からは、風の祭祀の本来の姿が明らかになるものとみられる。

そうした風の祭祀の一つに、済州島のヨンドンクッがある。風の祭祀そのものは普遍的であるが、前述のような地域的差異は、こうした比較対象から理解が進むと考えられる。この風の祭祀について以下のように紹介されている。

済州市のチルモリダンヨンドンクッは、2009年にユネスコ人類の無形文化遺産に登録された。強い風の後は暖かい風が吹くことを予想し、希望を込めて燃燈クッが行われ、祈願は霊登神になされる。15世紀以前には、山間を含む全島で行われたと推定される。祭場のコンドルゲ村は、面積2.53km<sup>2</sup>で、コンドルゲ港、サンジッネ：山地川、サンジウム：山地泉があり、村の東のサラボン：紗羅峰は、高度148.2mである。済州港の建設後も、海女の潜水や漁業は行われている。霊登歓迎祭は、済州市水産協の儒教形式の豊漁祭とともに行われる。チョガムゼ：初監祭、供宴、シル餅、ヨワンマジ：龍王迎え、シドリム：種蒔き、シジヨム：種占い、ヨンガムノリ：令監遊び、がなされる。シンバン：神房が多いので、クッでは2組の楽団が構成され、各シンバンも語り、歌い、踊る(済州特別自治道・済州文化芸術財団、2011)。

ヨンドンクッが登録された、ユネスコの無形文化遺産とは、世界遺産が有形であるのに対して無形のもを対象としている。先行の傑作宣言も含めて、2009年に代表一覧表が作成され、これまでに韓国10件、日本22件などが登録されている。

このクッのような巫俗は、歴史的に繰り返し排されてきたが、近年ではむしろ観光化により影響を受ける例が指摘されている。すなわち珍島では、旧暦三月の大潮の日はヨンドンサリとよばれ、日本でも流行歌になったが、ヨンドンハルマニの伝承に断片的な情報を集めて再構成し、「ポンハルマニのコサ

と、豊漁・豊作を祈る霊登祭とが、珍島霊登祝祭になった」という新たな伝承が作られたという(伊藤垂人、2003)。

潮が引いて陸繋島となることが「海が割れる」と表現されたが、このようにしてはじめられた祭祀が、伝統的な農漁村の祭祀とは自ずと異なることとなる。祭祀には多額の費用を要し、また生業の変化や人口減少などから、複数の祭りが統合されることも、祭祀の性格を変えている。

珍島のように、観光振興策などにより、祭祀は近年大きく変容しており、またメディアからは芸能面が求められるという。祭祀の中でのサンゼッソリでは、参加者からの占いの求めは済州4.3事件にかかわるともいう。人々にかかわる祭祀ゆえに、世相が直接反映される面もある。

ヨンドンクッは風の祭祀として貴重であるが、現在の実態には、本来の祭祀の意義は必ずしも示されない懸念がある。そのため本論では、済州島で行われる現在のヨンドンクッについて調査をするとともに、文献などからかつての祭祀を明らかにする。それにより、風の祭祀と風神の性格や意味について、検討を加える。またヨンドンクッは済州島だけでなく、朝鮮半島においても行われているが、島嶼における祭祀であるために、とくに海に関する祈願、祭祀様式がみられる。そのため、周辺地域間での相互の影響や変化を明らかにし、風の祭祀と海の祭祀のかかわりについても、検討を加える。

## II 済州島の地域と祭祀の概観

### 1. 地域の概観

#### 湧水と集落

済州島は朝鮮半島の南方海上にあり、同時に東の日本と西の中国の間に位置している。済州島の面積は1,848km<sup>2</sup>、2007年の人口は563,388人である。島の北側の済州市と、南側の西帰浦市の2市に分かれ、両者の面積はだいたい同じだが、人口は済州市の方が多(図1)。

東北東-西南西の方向の割れ目に沿って、多くの寄生火山が形成される。高度500m以下が山麓湧水帯となっている。南斜面には平坦地が少なく、東斜面は土壌の酸性度が高い(高野史男、1996)。また1939年の記載では、北済州では湧水が豊富であるが、水に恵まれない中間海岸では家屋の周囲に採水

林がある。北部から南西部では飲料水と関係して塊村になり、南東部でも疎状の塊村となるが、海から離れた高地では散村となる。海岸から5-10kmの内陸部が、集落の最も発達した地域であった(梶田一二, 1976d)。

すなわち比較的傾斜は緩やかであるが火山島であり、とくに水分条件が生活を大きく規定していた。内陸部の山麓湧水帯で水に恵まれるが、下方では水不足となり、とくに東部では顕著となる。こうした地では農耕も困難となるが、反対に海での漁業が重要となることと考えられる。

### 強風と石垣

島嶼であるため風は強く、済州では冬季に5m/s以上の強風の日は42.5%に達する。また海洋の影響を受けて半島部よりも温暖であるが、大陸に近いために寒気の影響を受け、1977年2月16日には、済州でも-6.0℃を記録している(李賢英, 1988)。強風を受ける北岸ではとくに、金寧、月汀、咸德里、狭才里などに貝砂丘が発達する。旧左面漢東里の南方8kmの樞の大木は、卓越風で南南東の方向に傾いている(梶田一二, 1976a)。石垣の高さは、歸德里では最高2.2m、城村里では1.5mとなる。新山里では石垣と生垣を併用する(漆原和子・勝又浩, 2007)。

島嶼であるため、水分条件に続いて、風は大きく影響する。家屋の周囲、また耕作地の周囲にも石垣が作られる。分布からは、台風の強風に対するというよりも、北西季節風の影響が強い。

### 山地の放牧

高度により、海岸地帯、中間地帯、山間地帯、森林地帯に分けられ、中間地帯と山間地帯で放牧が行われる。牛は南済州の中央、東部、西部に多い。東部は傾斜が最も緩く、寄生火山が最も多く、冬季の放牧に適している(梶田一二, 1976b)。企業的牧畜は東西両斜面で行われ、とくに東麓が中心である(高野史男, 1996)。

済州島では牧畜が行われてきたが、とくに東部で盛んである。このことは耕作地としてはあまり適さないにせよ、伝統的を受け継ぐ地域であるとも考えられる。一方南斜面は植生の垂直分布帯も200-300m高く、養蜂や柑橘類の栽培がなされるようになっている。

### 海岸の海女

海女は農閑期、漁期に操業し、寒中でも月に15-

20日潜水する。海女は東部海岸で最も多く、次いで北西部、南部、北部となる。最多はウド：牛島で、周辺一帯がそれに次ぐ(梶田一二, 1976c)。海女はチャムス：潜嫂といわれ、江南の南方海洋民族につながる。1969年には東部33%、南部30%を占めたが、南部で減少した(高野史男, 1996)。

北部から西部は農耕に有利であり、南部も温暖を生かして、果樹栽培などが可能であるが、東部では相対的に海での産業が重要となる。海岸付近の地域差は、海岸地形や海流などの条件以前に、後背地の違いが影響していると考えられる。

### 周辺との関係

済州島は古くはジュホ：州故、タムラ：耽羅とよばれ、また北部九州から半島南岸に倭人があった。1105年に高麗の郡制がしかれ、1370-1410年、1550-1570年の倭寇は、平戸や五島を本拠に半島から華南で強行貿易を行ったが、済州島は馬を供給した(高野史男, 1996)。

済州島の位置から、歴史的に周辺地域と大きなつながりがあった。伝統的な住居や食物をはじめ文化には、南方海洋の要素が多くみられる。済州島の建國神話では海の彼方より穀物がもたらされるが、沖縄のニライカナイでも同様である。ヨンドン：燃燈やシンバン：神房も、沖縄の火神やノロのように、地域に伝えられた祭祀である。とくに神は外来神として祀られるものも多い。南方海洋的な石像、トルハルバンは15世紀初頭に現れるとされるが、この時期は倭寇の活動が活発化したところであり、地域間の交流は盛んであった。江戸時代の鎖国政策では、海外渡航の禁とともに国内流入も阻止されたが、それ以前には周辺との交流が盛んであったと考えられる。

## 2. 風の祭祀, ヨンドンクッ

### クッ：賽神

韓国各地で行われる民間祭祀の一つとしてクッがあり、クッでは迎神-娛神-委神-送神が行われる。およそピョルシン：別神クッが、南部東海岸一帯に伝わり、村の豊穡と多産、安定と繁盛を祈り、1970年代の迷信打破の動きの中でも、豊漁祭として続いた。龍王クッは、東海岸の別神クッで最重要なものの一つで、海辺に出て海岸線と平行に船の旗を挿す(高雲基, 2007)。

なお江陵端午祭は、村の安寧を守る城隍神を祭る



ソナン：城隍クッとされるが、別神クッとあまり区別されなくなったという。

また一般祭(家祭)と、堂祭(村落祭)に分けられる。クッは歌、舞、劇的動作などからなり、無いものはピニョム：祈願という。1日以内の小クッでは主神のタクサン：卓床(祭壇)が1つだが、大クッでは多くの神が四方の壁に祭られる(玄 容駿, 1985)。

クッは多数の要素から構成され、何日も行われたり、類似の要素が繰り返し現れたりして複雑である。楽器の演奏や歌、舞や劇的な所作が含まれ、神事というよりも芸能的な面も強い。その構造や論理体系を把握することは困難といわれる。

### ヨンドンクッ

内容は複雑で、由来も不詳であるが、およそヨンドンクッは、ヨンドンハルマンを祭る風の祭祀である。神は二月一日に江南天子国、または一目人国から済州道に来て、ワカメ種、アワビ種、山椒種などをまき、牛島から本国に戻る。シンバンの予言で豊凶が変わり、霊登神を送るときは藁で小船を作り、各種のお供えを載せる(玄 容駿, 2002)。

大正時代には、半島の嶺南で霊登神が部落の山の上に降りて人が迎え、二月朔日より十五あるいは二十日まで人と会わない、と紹介されている(今村, 1921)。済州島の龍燈は、初出が1932年の論文で紹介される。島内各地の龍王夫人堂で、龍王賽神が行われ、そのときに藁の船、シントリ：白布が用いられる。龍燈姥は、海を渡ってくる風雨の神で、正月十五日に来て二月十五日に帰る。(赤松教授によれば)済州東門外の燈台に行く途中の龍燈堂で、二月頃に龍燈祭がされる。島内の奥地にも見られ、水山里では二月十四日に巫が龍燈竿をもち、各家を訪問して、十五日には放船する。山村人文化の遮歸に対して、海村人文化の龍燈がある(秋葉 隆, 1983a)。

### クッが行われる堂

燃灯神祭では、山西の頭毛浦は迎神浦、山東の牛島は送神浦と呼ばれる(任 東権著、熊谷 治・依田千百子訳, 1984)。ヨンドンクッはタン：堂という石垣で囲まれた聖所で行われるが、ホンピャンタン：本郷堂が多い。牛島の東天津、コンニユプドン：健入洞、ハドリ：下道里、新陽里、コソソリ：古城里、始興里、吾照里、朝天里などで行われる(加藤 敬, 1993)。なお、ハドリはカクシダンで祭りが行われ、ハンスリ：翰洙里でのみヨンドン堂で行われた(古谷野洋子, 2009)。

チルモリダン：七頭堂は、堂があった場所の七つの頭(峰)にちなむという。

### 祭祀の概要

ヨンドンクッは、島内各地で差異があるが、祭祀の内容は以下である。チョガムゼという招神儀礼で、18,000の神を招く。ポンプリ：本解は、シンバンが神の由来を歌う。ポンヒヤンドルム：本郷入りは、都元帥監察地方官と竜王海神夫人を祀る。供宴では、餅投げや歌い、娛神する。ヨワンマジで、道を作り、門を開け、龍王を祀る。シドリムでは、海産物の「種」を撒き、また種占いでは海産物の種に見立てた大豆などを撒いてどこでとるか占う。マウルドエクマグム：村の厄払いは、エンマギという鶏を犠牲にする。ヨンガムノリ：ヨンガム遊びは、厄払いをする。チアレムでは、供物を紙に包み海に投げる。トジン：渡津で、祭場に招いた神々を送り返す(菊地和博, 2003; 李 惠燕, 2003; 古谷野洋子, 2009)。

## Ⅲ ヨンドンクッと地域

### 1. 景観の地域性

前述のように、済州島のヨンドンクッは風の祭祀といわれる。風の神、また風の祭祀は普遍的にみられるが、日本の各地にみられる風の祭祀、風祭りとは祭祀の時、場所、内容など異なる面が多い。それはその地域の自然的基盤や社会的背景また歴史的経緯等々によることが考えられる。そのためヨンドンクッおよびその背景等に関して、済州島で現地調査を行った。その概要は以下である。

### 内陸山地

済州島は長径約70km、短径約30kmの長楕円形で、中央に漢拏山(1947m)がそびえる。全島が火山島であるが、島の大きさにくらべて山の高さは低く、そのため山麓部は、起伏は大きいと比較的緩傾斜面が広がり、放牧地と森林が続く。島の北部の済州と南部のサギ：西歸は、南北の縦断路で結ばれ、漢拏山の東方では750m、西方では1,100mの高地を通るが、そこから上方では傾斜が大きくなる。

本島の東部はとくに緩傾斜で、内陸部に低木の森林の散在する草原が展開する。南東部の標高200mほどの城邑には、伝統的な造りの民家が保存され、かつ今も居住している(図2)。基本的な家屋では、チュバン：厨房、サンバン：床房、コバン：庫房の

3棟が、コの字型に配置されている。民家の庭には石で囲まれた豚小屋があり、その入口には、石の腰掛型トイレが設置される。便所と豚舎の結合は南方文化的要素といわれる。またオンドル房をもつものがあり、北方大陸文化的要素もみられる。

#### 北部・東部海岸

現在済州島でヨンドンクックが行われるのは、主に北部から東部にかけての海岸地帯である。この北東部の海岸地帯では、集落でまた農耕地においても、多くの特徴的な石垣がみられる(図3)。プクチョンニ：北村里は、漁村であるが、住宅の周りに、石垣がめぐらされる。石垣には隙間があげられる。海女、潜水漁法の盛んな地帯であり、海辺にある石垣の中は、海女の仕事場、また祭祀の場とされる。

済州島には多くの寄生火山があるが、東部にはとくに多く分布する。なかでも東部海岸の、ソンサンイルチュルボン：城山日出峰(高さ179m)は、頂上に噴火口跡をもつ岩峰で、海岸付近できわだってそびえている。済州島の創成神話の地とされる景勝地であり、観光客でにぎわう。

その北東方3kmの海上に、牛島という、済州島では一番大きな属島がある。城山とフェリーで結ばれ、所要約10分である。牛島は、創成神話とも、また風神とも結びつきが強い。牛島ではとくに北西岸で風が強く、風下側となる海岸では海女が操業している(図4)。牛島は南東部に日出峰に山容が似た山(127m)がそびえる。北西に続く緩斜面上の斎場周辺では、高さ2mほどの丸く盛り上げた土饅頭型の墓がある。一方牛島南部の天津付近の海岸では、高さ1mほどの石積みの塔が多数建てられている。

#### 南部・西部海岸

南斜面では北斜面にくらべ、集落が海岸付近だけでなく、上部の草原地帯にも散在している。街路樹にヤシ類も多く、柑橘類の果樹園が、多数分布する。北側に多くみられる農業用ハウスも、南岸では少ない。

南岸のサギボ：西歸浦は、済州に次ぐ済州島の中心であるが、かつては港もなく、はしけで沖と結んだといわれる。済州より都市の規模は小さく、交通も少ない。西歸浦の市街の中央部には大きな市場があり、菓子、乾物、揚物、麺海苔巻などを含めて食品が扱われ、海産物と柑橘類がとくに多い。

南西部の海岸付近には、山房山(395m)、また

噴火記録の残る軍山(335m)という大きな寄生火山があり、これらの山は先の日出峰よりさらに高い。大静のシンピョンニ：新坪里付近では農耕地に作られた石垣の高さが低くなる。伝統的な家屋の集落が残るが、石囲いの配置は城邑と同じである。ただし屋根には石材が使われており、草葺ではない。

最西端の沖にはチャギ：遮歸島、竹島がある。その島を望む付近では、石垣がない。また砂浜がある一方で海食崖も続き、また土壌はきわめて薄い。石垣には熔岩が用いられるところが多いが、また安山岩のような緻密なものも用いられている。

北西海岸の翰林邑、月令里に本郷堂がある(図5)。堂は石垣でつくられ、神位が刻まれた神石が祭られる。中央に大きく、また名の記されない石垣がある。その右側のやや下方にはヨンガム神の石垣があり、左側の下方に本郷神の石垣がある。石垣に至る参道は、中で少しずつ曲がり、沖縄の御嶽のようである。

同じ北西海岸の挾才・キムニョン：金陵は、海が澄み、海水浴場となっている。周辺には耕地はあまりみられない(図6)。

## 2. チルモリダンヨンドンクックと風の祭祀

ヨンドンクックは旧暦二月に行われる。その期間である、2012年3月、2013年3月に、現地での調査を実施した。

### 健入洞, チルモリダン

チルモリダンは、サラボンという小山の鞍部にある。丘陵一帯から海が望まれ、散策、ウォーキングなどの施設が整う。斜面には10m×20mほど石垣で囲まれた地に神石が安置されるなど、静寂の地である。チルモリダンの山麓側には、無形文化財伝授会館があり、この中で旧暦二月十四日のヨンドンクック送別祭の準備が行われる。

健入洞の丘の下に国立済州博物館があり、その庭で、旧暦二月十四日のヨンドン送別祭に先立ち、4日間フェスティバルが行われるが、無形文化遺産であることが喧伝される。フェスティバルでは、太鼓、舞踊等の伝統芸能の他、シンバンも現れ、タイマツをもった神たちをもてなして送る、ヨンガムノリも行われる。

チルモリダンの周辺には、送別祭前日よりテントがたてられる。ヨンドンクックの当日、半島部では降雪があり、晴天ではあるが大陸から吹き付ける寒風により、冬のような低温であった。

## ヨンドンクッ

チルモリダンのヨンドンクッ、霊登送別祭は、当日8時過ぎから準備が始められる。青、赤、黄、白、黒の五色の布が、堂の上に張られる。神石の背後の神垣には、飾り板が並べられる。その前に、神位を記した赤い幡が吊るされる。幡の両端は、青、桃、黄、紫、赤の切り紙が飾られる(図7)。神石の前に整えられた祭壇には、香炉、御飯、餅、果物、米などが置かれる。斜め後方には、小さな藁船が用意されている。

## チョガムゼ

祭祀の場に20人くらいの女性と、男性2人が入る。正座する女性もいる。シンバンが白い靴、内に緑、青、一番上側に真紅の衣装を着ける。9時過ぎにチョガムゼが始まる(図8)。シンバンの脇にいるソミ：小巫から次々に渡される白布に書かれた名を、太鼓を打ちながら読み上げる。また神位の記された赤い幡の前方に、奉納者の名の書かれた、長さ1mほどの白布を吊るす。奉納者の中には、流刺網(유자망)の船名が多く、地元の山地の漁協の潜嫂会(산지 어촌계 잠수회)の名もみられる。なおこの布の下端には、1万ウォン札が貼り付けられている。

10時過ぎ、シンバンは立ち上がって、両手に白い紙の房のついた、短い神刀を持ち、二組のソミらによる鐘、太鼓、銅鑼に合わせて、ゆっくりと舞い始める。シンバンの舞いはステップを踏むように、軽々としている。クムンヨルリムといわれ、扉を開けて神の世界と人間の世界をつなぐ。

この間に、一人のソミが斜め後方に敷物を広げ、台に水などを用意し、匙で撒いて道を清める。さらに、笹の葉につけて撒いて清める(図9)。また、焼酎を口から霧吹きして清める。

シンバンが整えられた道に行き、神刀の先で米を撒く。これはシンチョングェという、神を導く儀式である。さらにソクサルリムといわれ、神を招いて楽しく遊ぶ。また紙片が燃やされる。

## 供宴

昼前から祭場の脇に張られたテントでは、鶏肉と刻み葱の入った素麺とキムチが用意され、人々にふるまわれる。祭祀場内でも湯が沸かされ、飲物がふるまわれる。12時より休憩し、その間も1名が太鼓を打ち続けるが、他の人たちは祭場内で食事をす

13時頃から供宴がはじめられ、2名のソミにより餅を高く投げあげて交換される(図10)。さらに別の組のソミによっても行われる。この後先生らに連れられた20人ほどの子供たちが、祭場の中に入る。またシル餅、あるいはトルベといわれる、直径10cmほどの丸い蒸し餅が、人々に振る舞われ、何もつけずに食べる。またソミが人々の間を回り、奉志を集め、語りかけ、問答をする。子供たちはしばらくして堂から出る。

## ヨワンマジ

13時半頃から真紅の衣装のソミが、神刀を手にして立ったまま朗誦を始める。午前中にはシンバンによって行われたが、ヨワンマジでのチョガムゼにあたる。

さらに龍王と霊登神が来る道が整えられるが、ヨワンジリチムといわれる。斜め後方に、午前中よりも長い莫蔭を敷いて道が作られる。先端に小卓を並べて祭壇が作られ、供え物が並べられ、中央には豚の頭や大きな餅などがおかれる。さらにその後ろには藁で作られた小舟が並べられる。道の両側に葉のついた笹枝が立て並べられ、先には小さな白い布と五色の飾りがつけられる。枝は片側8本ずつ、二列に並べられ、その下にはワカメがおかれる。この数は船の数と同じである。なお笹には5千ウォン札も留められている。ソミは鐘、太鼓、銅鑼に合わせて舞い、龍王神、霊登神を迎える(図11)。

14時半、他のソミが道に直径数cmほどの円形銅板を撒く。この巫具は天文といわれ、神が来たか否かが占われるという。銅鑼、鐘、太鼓の中、小鉢に入れた水を笹の先につけて撒き清めるセドリムが行われる。15時、婦人ら7人が道の端に座り、神を迎える。

## シドリム・シジョム

ヨワンマジは、司祭も参加者もほとんどが婦人である。本来、海女の祭りであったと考えられる。16時前、シドリムが行われる(図12)。16時、道の端にはほぼ全員が集まり、白い筒状のものの前に座る。このとき神道の両側に立てられた笹の先が結ばれて、神道は閉じられる。ソミが白布で巻かれた1mほどの棒を持って、祭場を回る(図13)。さらに婦人らが莫蔭の上に粟を撒く。その形で豊漁を占うとされ、シジョムといわれる。それが終了すると、婦人らは祭場の片づけを始める。

## ヨンガムノリ・トジン



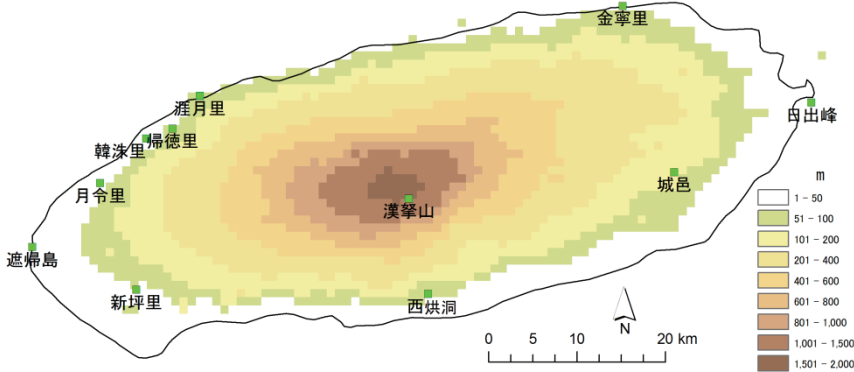
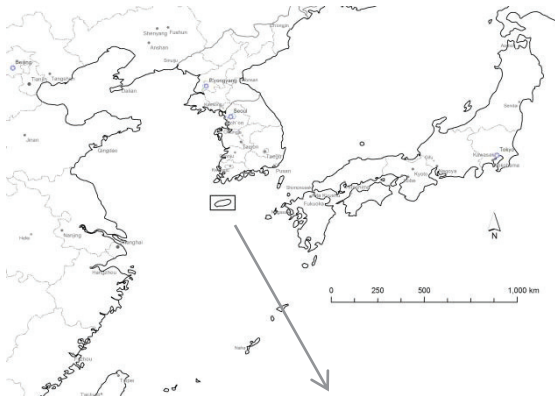


図1 済州島の地形と関係地点

中央に漢拏山がそびえ、東西方向に伸びる軸に沿い、多数の寄生火山がある。ヨンドンクツに關係する地点は、主に海岸付近に分布する。標高はSRTM30、ArcMapで描画。



図2 風と伝統的家屋形態

城邑に保存される民家では綱をかけて茅葺屋根をとめるが、強風を避けるためといわれる。



図3 風と耕地周囲の石垣

金寧の耕地周囲に石垣がめぐらされ、ネギなど野菜が栽培される。海岸付近の家屋は、さらに高い石垣で囲まれる。



図4 東部、牛島の海岸

海岸付近も熔岩で覆われ、砂浜は少ない。現在も海女が多く、ヨンドンクツの期間にも潜水が行われる。



図5 西部、海岸付近の本郷堂

月令里でも石の神垣で囲まれている。旧暦正月に、豊作、豊漁、長安、繁栄を祈願して祭りが行われる。



図6 西岸の沿岸部

挾才や金稜では白砂の浜が続き、沖に1002?年に噴火した飛揚島を望む。この付近にも、ヨンドンの伝承がのこる。



図7 チルモリダンのヨンドンクツ

神位の記された長さ2mほどの14本の赤い幡が吊るされる。霊登の各神位は、右側の6本の幡にみられる。



図8 初監祭の拝礼

ヨンドンクツでは、はじめの初監祭で、多数の神々の名をよみあげて、祭りがはじめられる。



図9 セドリムの清め

神々を招き入れるために、小巫が小鉢に入った水を笹の葉につけ、撒いて清める。





**図10 餅投げでの饗宴**  
鐘、太鼓、銅鑼の音の中、直径30cmほどのシル餅を、高く投げあげて交換し、神々を娛ませる。



**図11 龍王迎えの祭り**  
祭壇に供物、奥に藁の小舟が並ぶ。莫藁を敷いた道の両側に笹枝が立て並べられ、海の神を迎える。



**図12 海の作物の種蒔き**  
小巫が笹枝の下部におかれたワカメを、細い棒で投げる。神がワカメ、アワビ、サザエなどの種をまく所作とされる。



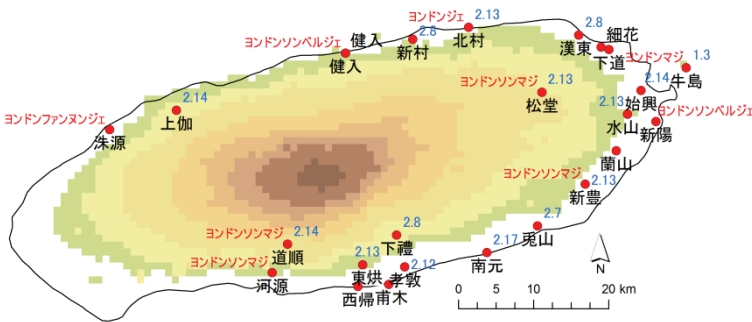
**図13 龍王の祭りでの奉納**  
祭りの終わりに近づくころ、小巫が白布で巻かれたものを持ち、祭場をまわる。その後ろに人々が続く。



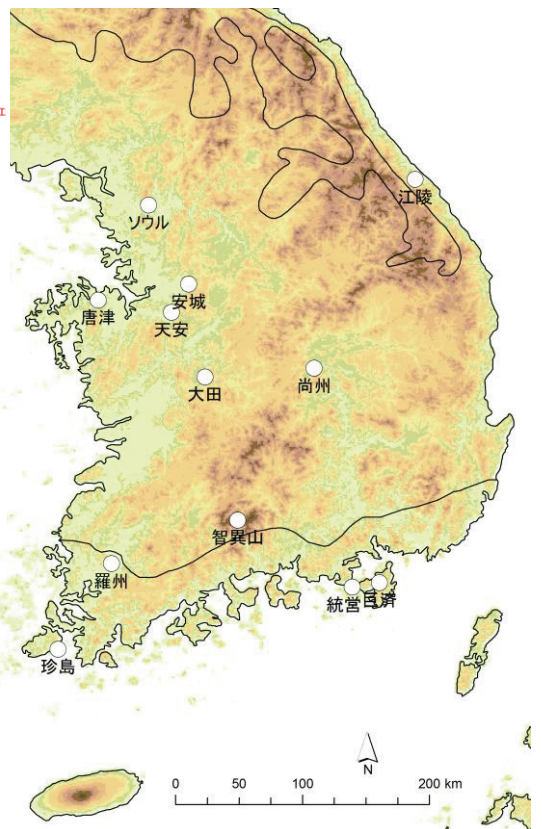
**図14 令監の遊び**  
黒い衣装を着て火のついた松明を持った令監七神が、祭場に招かれる。供え物をもって踊った後、かついで帰る。



**図15 渡津での藁船**  
渡津では陪房船という船に、霊登神を乗せて、送りかえす。かつては海に流していた。



**図16 濟州島のヨンドンクツ**  
濟州島では、各地でヨンドンクツが行われていた。行われた村(黒)、祭り名(赤)、および祭日(青)を示している。ヨンドンクツの調査(玄 容駿, 1969)にもとづき図化。



**図17 朝鮮半島南部のヨンドンクツの関連祭祀**  
朝鮮半島南部一帯には、海岸付近に限らず、ヨンドン信仰や立竿民俗が分布する。濟州島のヨンドンクツは、これらの地の伝承にまつわる。



17時ころに、私服に着替えたシンバンが神道の先端で太鼓を敲く。このときには両側の笹は取り払われている。シンバンが祭場外にいたヨンガムを呼ぶと、黒い衣装に白い紙の覆面をし、火のついた松明を持ったヨンガムが堂に入ってくる(図14)。ヨンガムの7神は、背に藁の筒をあみだに背負っている。この頃には祭場は、幡を除いて片づけられている。ヨンガムはそれぞれ供え物をもらい、踊った後、あらかじめ供えられていた船をかつぎ、そして退場する。これはベバンセン：陪房船に、霊登神を乗せ、トジン：渡津という神を送りかえすことにあたる(図15)。船の帆には、船の名などが書かれている。17時半過ぎに、祭祀は終了する。

### 3. チルモリダンヨンドンクッについて

クッにおける司祭は、シンバンとソミらによる。その他にも楽器を演奏する人や、種占いを行うなど、多くの人がかかわる。クッでは観客と対面した、個別の問答がある。それは日本の祭祀では、神職による神事の斎行に続いて、多くの氏子や崇敬者らによりて奉納行事が盛大に行われるのとは基本的に異なっている。

済州島でのシンバンは、半島部では一般にムダンと呼ばれ、シャーマンの中に位置づけられる。その巫術は主に北アジアで行われており、ヨンドンクッへの、北方大陸系の影響を示している。しかしヨンドンクッには南方海洋系の影響もみられ、とくに来訪神などはその例であり、またダン：堂は九州などでのモイドン：森と響きが類似する。なお、シンバンは男性とは限らず、舞などには女性的な要素もみえる。

チルモリダンヨンドンクッには多様な要素が混在し、もとよりその構造の理解は困難といわれる。また先述のように、近年の祭祀の急激な変化もある。現在の祭祀および風神信仰に関して、済州大学において、ききとり調査を行った。その概要をまとめると、以下である。

#### チルモリダン

チルモリダンヨンドンクッに関して、チルモリ、健入洞、コンドルゲなどの地名が混在している。もともとは、健入洞の中にチルモリがあった。海岸に堂があったが、1920年ころ港が作られたので、山に移した。

霊登歓迎祭と豊漁祭とが、組まれている。これは、

霊登歓迎祭と豊漁祭は、かつては一つであったことによる。李朝末から豊漁祭ができた。海女と漁師の祭りである。それぞれの祭の主催者は、共に無形文化財に指定され、かつ知己であったので、経費のかかる祭りを、一緒にやるようになった。

堂の性格として、沖縄の御嶽と類似性がみられる。これは、堂と御嶽はよく似る。堂は見ることはできない。

#### ヨンドンクッ

龍王海神夫人の夫神は、龍王とよばれていない。これは、龍王海神夫人は龍王の奥さんである。都元帥監察地方官が龍王である。都元帥は、江南天子国の名将で、結婚して済州島に戻った。

燃燈クッには、龍王マジやヨンガムノリの要素が含まれている。ヨンガムノリで松明を持つヨンガム達は、神の様相とは異なる様相である。このタイムツをもつのは、ヨンガム神である。1) 女性の病をうつす、2) 鉄を作るたたら火の神、3) 船の神、の性格がある。1970年ころから、ヨンガムノリを、燃燈クッと一緒にやるようになった。

#### ヨンドン神

ヨンドンは風の神で、済州島は2週間で回り、牛島から去って行き、さらに済州島以外も回るといふ。ヨンドンクッには、祖先崇拝は入らず、また農業のための祭祀ではなく、とくに台風は黒潮に沿ってそれるため、風には台風は対象とされていない。

ヨンドンは祭りでは「燃燈」、神では「霊登」の漢字があてられている。これは、本来は「燃燈」であるが、「霊登」神では神の意味が込められているという。

## IV 風の祭祀と風の神の検討

### 1. 風の祭祀の関連要素

#### 本郷神と祭祀

ヨンドンクッの行われるチルモリダンは、神聖な空間と俗界を神垣で区分し、ボンヒャンシン：本郷神の神位を祀る本郷堂である。そのことも風の祭祀や風神の理解を困難にしている。

ヨンドンクッは、1981年には済州港と沙羅峯間の、東海辺の丘で行われていた。その後何度も移転して、南堂ハルバン爺、南堂ハルマン婆も祀られる(金泰順, 2011)。済州市中心のイルドドン：一徒洞、マグンゴルの堂を一緒に移したという(玄容

駿, 2002)。以前は一月に新年祭で堂神に奉げる新年挨拶, 二月にヨンドン祭で風神・豊漁祭が行われていた。ヨンドンクッの1986年の重要無形文化財指定後, ヨンドン祭で共に行うようになった(金泰順, 2011)。2004年からチャムス会と水産業協同組合の共同で行われる。神石は新しく作られ, 祭りの内容もエンマギからヨンガムに変わった。ペバンソンの船がたくさんあるのは, それぞれのチャムス会のものがあるからである。ソウゼッソリでは, 4.3事件のときの心の恨みが唄に昇華した(金泰順・古谷野 洋子・大橋 克巳他, 2009)。

ヨンドンクッは一つの祭祀であるが, その祭場では風神以外の神が祀られており, 祭祀も同時にまたは一体化して行われるので, 祭祀は複雑化する。チルモリダンの場合, 移転により多くの神が合祀され, さらに複雑になった可能性がある。

### 海岸部での祭祀

濟州島でヨンドンクッが行われる堂は, 現在では海岸付近にあり, かつ北部から東部の海岸付近に多い。もとより祭祀は地域の影響を受けるが, 風の祭祀にも影響が考えられる。

北村里では, チアレムでヨンドン大王, 龍王, 海で死んだ人への供物を流す。ハドリでは, 海岸付近の神垣のカクシダン: 嫁堂で行われ, 切紙を焼き, 鶏の頭を切り, 供物を流す。ヨンドン神と龍王神が共に来て, チャムスクッ, または龍王クッをする。牛島では, ヨワンクッはヨワンマジともいうが, ヨンドンクッはヨンドンマジとはいわない。西部海岸の翰洙里はピアンド: 飛揚島を前にし, 神垣のヨンドン堂があった。海辺にキメ: 竿を持って行き, ヨンドンハルマンを迎え, 神招き5日, 神もてなし5日, 神送り5日をし, シンバン100人が集まった。ヨンドンクッ, ヨンワンクッとチャムスクッは, 同じ観念で受け入れられている。エンマギはヨンドン神とは関係がない(金泰順・古谷野 洋子・大橋 克巳他, 2009)。

海岸部で行われているために, 龍王クッ, さらに潜嫂クッと一体化し, さらに海に供物を流すことにより, 海の祭祀の要素が強い。

### 濟州島のヨンドンクッの特色

朝鮮半島中部以南では, 風神祭の迎燈婆様は, 風雨神, 農神・穀神, 海洋神, 疫神の性格が指摘されている。慶尚道では風神は天に住むが, 濟州島では海から来る(古谷野洋子, 2009)。本土では神がシャー

マンに降りるが, 濟州島では神はシャーマンには降りないため, 神刀で占って神意を問う。ヨンドン神は本土ではヨンドンハルマン一柱であるが, 濟州島では五柱あるいは七柱が祀られる。また本土では農耕神, 濟州島では海の農事神である(李 惠燕, 2003)。

ヨンドンは, 濟州島は朝鮮半島南部, とくに海岸部との間で類似する。ヨンドンハルマンに類する風神が, 風雨, 天候を司り, 地域により, 農耕あるいは漁労とのかかわりの中で信仰される。祭祀の様式は相異なるが, そこには地域の信仰の基盤において, 北方系の要素と南方系の要素の影響の差異が影響する可能性がある。

## 2. 風の神にかかわる神

### 本郷神との識別

ヨンドンクッでは, 主神は霊登神だが, 1973年には主神は本郷堂神であった。チルモリダンでは都元帥監察地方官とヨワンヘシンブイン: 龍王海神夫人である。夫神は土地, 住民の生死, 戸籍など生活全般を守護し, 婦神は漁夫と海女の生業や, 外国に出た住民たちを守護する。霊登神は, 漁夫や海女の海上安全と生業の豊かさをあたえる。都元帥は天を父, 地を母とし, カンナム: 江南天子国を平定した。平定を天子様がほめたが, 都元帥は龍王国に行き, さらに濟州道にきた。まず漢拏山のペンノクタム: 白鹿潭に入って陣を敷き, 山地川のチルモリに来て, この地を守護するようになった(玄 容駿, 2002)。ただし都元帥を迎えるが, 続く三千の兵卒は退けられる。ヨンガムは, ソウルの南山谷に住む許丞相の7人の息子で, 漢拏山に来たならず者の末っ子を連れ帰ってもらう(金 裕卿, 2011)。

この都元帥は江南から, ヨンガムはソウルから来て, ヨンドンも外来神として共通し, また多くは帰ることが共通している。チルモリダンでは祭祀が共に行われるにせよ, 神格としては区別されるが, 都元帥やヨンガムは世俗的, 具体的に表されるのに対して, ヨンドンは自然的, 抽象的に表されている。

### 龍王神との識別

東部の城山邑吾照里では, 祭神のヨンドンハルバンは, 東風だと気の荒い爺さん, 北風だと気の優しい爺さんとされる。龍王は海女, また船や漁師を守る神で, ヨンガム(トケビ)は船主の多い地域で祭る。ヨンドンハルバンは来訪神であるのに対し, 龍王



は身近な神である(菊地和博, 2005)。また、霊登神は、風神、農耕神、漁業神、来訪神であり、また海畑に海藻の種を撒く海田耕作神でもある(문 무명, 2005)。

チルモリダンでは、ヨンドンとヨンワンの祭祀は一体化しており、神格の相異は不明であった。海での生業を保証する海にかかわる神として、類似する性格がある。ただし、本来は異なるものであり、龍王は海女が潜水する海辺の神、ヨンガムは船の出漁する海の神、ヨンドンは風にかかわる来訪神として、区別されている。ヨンドンの複雑な性格は、地域ごとでの後世の習合によるのであれば、変容以前を明らかにすることが必要である。

### 3. ヨンドン神の変化

#### 史料での記載

『東国輿地勝覧』では、「又二月朔日、於歸徳金寧等地、立木竿十二迎神祭、之居涯月者、得槎形如馬頭者、飾以彩帛作躍馬戲、以娛神、至望日乃罷、謂之然燈、是月禁乘船」とされる。すなわち、然燈は、二月一日から十五日に、北濟州郡翰林邑歸德里、涯月面涯月里、旧左面金寧里などで、木竿十二を立てて迎え、躍馬戲で楽しませたが、この間乗船は禁じられた。『耽羅誌』では、大唐商人が州境で漂没し、四体分解して頭骨は魚登浦に入り、手足は高内涯月浦に入ったが、毎年正月に西海から来る風の迎燈神で、神が降りると馬頭のようなものを飾り、彩帛し、躍馬戲して娛神し、二月旬望に至って、帆檣を具えた舟形を造り、于浦口で送神する(玄 容駿, 1969)。

後者での迎燈の神格は、大唐商人の漂没屍体とされる。来訪神とされるには、世俗的であり、また具体的でもある。送神されることは、厄払いの要素が濃厚である。

#### 民間の伝承

翰林邑水源里ヨンドン堂で、二月一日に歓迎祭、十五日に送別祭をする。神房がワカメや「山稻」の豊凶を占い、藁のチャゴン船に各種祭物を載せ、海に出して送神する。昔商売で通った中国女人が破船して水死したが、この霊がヨンドンハルマンともいう。また山海経所載の奇人国である一目国の要素や、南方の食人風習的要素があり、そこではヨンドン神は外来の男神である。南韓一帯では女神で、男神は後代の夫婦神想定で加わり、「ヨンドン大王」云々も後代の神話化とみられる(玄 容駿, 1969)。

『勝覧』には然燈の名があるだけで、その由来にはふれられていない。是月禁乗船とあることを、後世に他の伝承と付会させ、難破、漂没の挿話がなされたことが考えられる。

#### 風の祭祀と他の祭祀

濟州島内の大きい堂では、およそ年4回のタンクックが行われる。一月に新過歳祭—新年村落祭、二月にヨンドン祭—海女採取物増殖祭、七月にマブルリム祭—牛馬増殖祭、九、十月に市万国大祭—秋収感謝祭であるが、とくに新過歳祭が広く行われる。ヨンドンと関係ある堂祭には、歓迎祭的および送別祭的なものがある。これらのヨンドンクックは、全島的に分布する(図16)(玄 容駿, 1969)。

#### 迷信打破以前のヨンドンクック

チョチョンミョン：朝天面のプクチョルリ：北村里では、住民は農業と漁業に従事してほとんどが海女をし、89.2%の世帯では男性は儒教的祖先崇拜、女性は巫俗信仰である。二月十三日のヨンドンクックは最も盛大な祭りで、1968年には約1,000人の住民中、女約200人と漁師幹部の男7-8人が参加した。ヨンドンクックは「ケニョクック」、または「チャムスクック」とされ、ヨンドン神と龍神に対する祭儀を兼ねる(玄 容駿, 1969)。

すなわちヨンドンクックは、ほぼ女性の祭りであり、その生業は海女であった。それ以前においても、海女の祭りであることが明瞭であったと考えられ、このことはヨンドン神を実質的に海女の採取物の増殖保護神としていた。

### 4. 蛇神と龍神

#### 風神、龍神、蛇神

南岸の西歸里の本郷堂に祀られる本郷大神・本郷夫人は、風の男神と雨の女神で、また竜宮夫人、海の女神も祀られる。風神は漢拏山に湧き出て、この地の美女と結ばれるが、その妹と恋におちる。姉妹の戦いで妹の霧の魔術が優り、姉は西烘里、妹の風神夫婦は東烘里に祀られるようになる。風雨の神は燃燈姫といわれ、二月に燃燈祭または風神上りという風祭が行われる。燃燈姫は、本来は海村人の文化と考えられる。一方その東方の兎山里の兎山堂は、羅州から飛んできた女神を祀るが、龍神の変形した蛇神といわれる。羅州の錦城山祠の神が怒ると雷雨・雲霧・風浪を起し、最も恐るべき一・二月の季節風は北西風のため羅州の錦城山の信仰に結びつく。

山村人は蛇への関心が大きく、蛇鬼信仰は兎山堂を中心に季節風の弱い島の東南部に残った(秋葉 隆, 1954)。

島の東西端の遮歸・金寧に起きた蛇鬼信仰は、一時は全島を風靡し、海村で強く、山・陽村で弱かった。しかし、金寧はむしろ龍燈大祭の中心となった。龍燈姥は非常に凶暴な南朝鮮の神で、水死人を装い、金寧の浜に打ち上げられたといわれ、大祭は金寧の枡堂で行われ、二月十三日に神房の家で賽神、十四日に龍燈竿を奉じてめぐり、十五日にダンドン堂、置山堂にもって行く(泉 靖一, 1966)。

東烘里と西烘里は島の南部、また兎山里は島の南東部にある。これは冬季季節風の風下にあたり、外来神としての風神が伝えられるにせよ、他の地域とは異なる影響が考えられる。風神信仰にしても在来の風雨神が伝わる。先行の蛇鬼信仰が、北東部などでは、龍神また風神信仰に変わるのであれば、風神信仰には島外からの影響が強いと考えられる。

済州南方4kmの三義讓岳の麓に山神堂があり、漢拏山神を祭り、五穀豊穰を祈る。牧使李衡祥は、肅宗二十八(1702)年より2年間の在島中に、巫俗の聖所の淫祠や仏宇を徹底的に破壊し、巫俗を儒教に切り替えようとした。儒教と巫俗は男女の別に支持されることになる(泉 靖一, 1966)。李衡祥牧使は堂500、寺刹500を壊したが、神房が観徳亭の広場に堂旗を出して14日間クッをすると広壤堂の旗竿が龍淵側に歩み、東側の空に浮び上がって雨がもたらされたため、この堂だけは壊さなかったといわれる(秦 聖麒, 1970)。

巫俗を排する動きは繰り返されたが、その際にも天候に関する巫俗を排することはできなかった。このことは蛇鬼信仰が廃れても、龍神などの信仰が伝えられることに影響すると考えられる。

## 5. 風神と立竿

### 半島部のヨンドン

済州島の風神信仰には、島外の風神信仰が影響したと考えられる(図17)。ヨンドンの祭りは朝鮮半島各地にあり、蓋馬高原、狼林山脈、白頭山脈、智異山などの周辺に多く住む火田(焼畑)民は、二月にヨンドン神を小豆蒸し餅でもてなす。二月一日から十五日または二十一日まで留まり、毎日味噌・醤油のかめ置き場に清水をおいて祀る(金 鎮順, 2003)。

慶尚南北道では「風上げ」といい、二月一日早朝

に祈る。白紙に家族の生年月日を書いて焼き上げ、竹を枝付で立て二十日まで置く。このとき、天上から霊登媽々が降りてくるが、嫁を連れてくると暴風が起き、霊登風という。霊登神は、霊童神、嶺東神、嶺登神、嶺童神とも表わされる。蔡濟恭の焚岩集に、風神歌がある。済州島のヨンドンクッ：燃燈祭と、ヨンドン：霊登神は、同一の起源と思われる(朝鮮総督府, 1931)。嶺東神はヨンドンハルモニ：嶺東婆といわれ、慶尚南北道に伝わる。漁夫が東海の女島に漂流し恋殺され、冤魂が二月の一月月梁木にきて宿る。嶺南では、ヨンドンハルモニ：燃燈婆が二月一日に地上に降り、二十日に昇天する。水汲瓢に井戸水を汲むと、作物の出来がよくなる。焼き紙をして家族の福を祈る(任 東権, 1969)。

ヨンドン信仰では、水を供えること、竹竿を立てること、焼き紙をすることなどに特色がある。現在の済州島のヨンドンクッでは、その要素は不明瞭であるが、この地域一帯に共通していたことが記されている。

### 済州島の鳥追い・立竿

済州島の迎燈竿は、立竿の名残である。半島南岸では二月一日の霊登媽々の祭りで、葉の付いた竹の枝を厨房や後園の浄所に立て、色布紙片をつけて、供え物をして焼紙し、祈願する。巨済島では霊登姥上りまたは風神上りという。東岸の長承浦あたりでは水竿といい、正月晦日の夜に、竹竿の上部から色布を垂らしたものに、小器に清水を盛り、風神の降りる二月一日から十九日まで、毎朝水を替える。巨済地方では豊年を祈る餅を作って、風神が上った後に焼いて食べる。済州島の燃燈姥は風神で、霊登風をはらす。昇天は二月九日、十四日、十九日である。禾竿は正月十四日に立てる長竿で、上部に藁の苞を結び、縄一筋または三筋を垂れる。頂に紙片をつけることもある。縄は稲葉の形に作り豊作を祈る。禾竿は、巨済島では鳥がとまり遊ぶ所で、鳥止峰の字をあてる(秋葉 隆, 1983b)。またチルモリダンヨンドンクッでは、記録では大竿12本が立てられたが、今日では龍王六門として2列に12本を立てる(玄 容駿, 2002)。

上記にみられるように、水、竿、焼紙などが用いての祭りは、鳥や稲穂を象徴するものとして、農耕と関連するとみられる。済州島ではその火山島、沿岸での漁などから、海とのかかわりが強くみられたが、農耕が盛んな地域では、風神信仰は異なる変容



が考えられる。

## V 風の祭祀の変容

### 1. 「ヨンドン」の祭

#### 中国のヨンドン

ヨンドン：燃燈の祭りは、中国でも行われる。燃燈は漢代の太一神（北斗神）の祀りを起源とし、仏教の正月十五日の燃燈が加わった。大業二（610）年には洛陽で燃燈行事が盛んとなる（中村裕一，2009）。後漢末から南朝には、正月十五日に宮廷に灯樹という照明がたてられた。隋の煬帝のとき、僧侶が厄払いをするようになり、仏教的色彩を帯びた。正月十五日夜の「元宵張灯」の行事は、唐代に盛んとなる（中村 喬，1988）。唐では、灯夜は正月十四、十五、十六の三夜で、北宋末より五夜となる。十五日は正月行事が終って最初の満月なので、陰気を払い陽気を導く。清代の乾隆の頃には灯夜は、正月十三日の上灯から、十五日の元宵、十八日の落灯の六日間であった。今日でも灯節は、春節の最後を飾る最も華やかな行事である（中村 喬，1993）。

すなわち、ヨンドン：燃燈という行事が、古代より小正月の行事として伝えられる。ただし、風神信仰との関係は不明である。

#### 朝鮮のヨンドン

朝鮮半島では現在、ヨンドンジェ：燃燈祭は四月八日で、クァンドン：観灯ノリがされる。李朝では各家庭でも灯を竿竹に吊るし、ホキ：呼旗といって、子どもたちが材料をもらい歩いた（韓 丘庸著・姜孝美画，1997）。

このヨンドンは中国と起源は同じと考えられるが、四月に行われる。しかし、かつては正月あるいは二月に行われていた。

1800年前後の柳 得恭著『京都（ソウル）雑誌』、1819年の金 邁淳著『洌陽（ソウル）歳時記』、1840年前後の洪 錫謨著『東国歳時記』は、歳時風俗研究の最も重要なテキストとされる（大石風世，2008）。この中にはヨンドンも記されている。

『東国歳時記』では、嶺南地方（慶尚道）で二月朔日に靈登神を祀り、このヨンドンハルモニ：燃燈婆は風神である。済州島では、二月朔日に金寧、歸徳などで12本の竿を立てて神を迎え、涯月では馬頭形の木を彩帛で飾り躍馬戯をし、十五日まで続く。済州島では春（三月）には広壤堂や遮歸堂に集まり、

遮歸神、蛇神を祭る。ソウルでは、四月八日は燃燈の灯夕で、数日前から雉の尾羽や色帛をつけた燈竿を立てる。高麗史で崔怡のころ（1219-1249）に、燃燈を正月十五日から四月八日に変えた。子供らが剪纸で竿に旗を作り、米と布を求める呼旗が遣る（洪 錫謨著・姜在彦訳注，1971）。ただし、『高麗史』では、正月望燃燈二夜、四月八日燃燈、燈竿（李 錫浩，1991）、のときもあった。

この二月のヨンドンが現在に伝わると考えられる。ただし、済州島の燃燈は『興地勝覧』から引用されているので、李朝末には異なることも考えられる。

なお躍馬戯に関し、かつて陪房船は、家ごとに藁船を作って靈登神を送り、一番早いと豊漁を得ると信じられた。ヨンドンクッの躍馬戯は、人が走りまわる遊びではなく、この豊漁占的性格の行事であったと考えられている（玄 容駿，2002）。

#### 日本のドンドン

天保の風俗を記した『守貞謾稿』では、小正月の左義長で、男童らが家をまわり門松・縄などを乞い、とんどへあげた。江戸ではこの風俗はなく、大坂ではトンド、チャンギリコという。左義長は、竹5本を立て、鷺2、帯3、苧12筋を末広がりにつける。ホウセウジュヤ、ドンドンと囃すという（喜多川守貞，2001）。

トンドとは、竹が焼けて節がはねる音、燈土のなまりともいい、左義長は、毬杖を三つ組み合わせた三毬杖によるともいう。三義長は、中国で仏教と道教がくべられた際、左に置かれた仏教の経典が燃え残った故事によるというが、古くから疑問が呈されている。

トンドは太陽崇拝の火祭り、原始神の誕生日が冬至であるのは太陽の再生を意味する。新春初の満月の夜を年の境目として、火祭りをして悪霊を追いやる。子供の正月行事の鳥小屋は若者の寝所で、竹を1本立て五色の神旗をつけ、15条の縄を垂らし、枝付竹を3本立てて、垂らした縄でまきつけて、5、6人が寝られるようにした（藤沢衛彦，1971）。

鳥追い、鳥小屋は、ヨンドンの立竿に通じる。トンドはチャンギリコともいわれたが、能登キリコ祭りの高さ数mの灯籠は、キリコまたは奉燈といわれ、ヨンドンに通じる。なお、鶏追（けい）は、三義長と響きが似ている。なお東北や北海道で、鶏の唐揚をザンギヤザンキとよぶのも、響きが似ている。ドンドン、サギチョウの語源は不明であるが、

小正月の行事に特有であることは、そこに鳥が要素として共通する可能性がある。

## 2. 祭具と神名の影響

### 風雨順調の祈願

先述のように、風の祭祀としてさまざまな民俗が伝わる。朝鮮半島南部に伝わる風神は、ヨンドンハルマンネ、ヨンドンハルマム、ヨンドンハルマニ、ヨンドンハルマシ、ハルマシ、ヨンドン風、風神ハルマンネ、ヨンドン麻姑ハルマニ等とよばれる。ヨンドンハルマンが来訪する祭祀では、立竿が大きなはたらきをする。さらに立竿は風の祭祀を変容させたことが考えられ、その影響を検討する。この祭祀の例は、以下のようである。

1) 東部地方では、正月晦日に門前に黄土を敷き、大門に左網縄をかけ、青葉がついた竹を二三枝さして不浄を避ける。鶏鳴後に井戸で浄華水を汲取って厨で浄飯を作り、ピョッカリ：立竿の前に置く。主婦が祈った後、青竹三個を交叉させて上部一尺ほどの所を結び、その上部に糸、五色布片、白紙を付け、新瓢の浄華水をつけ、農事豊饒、家内安泰を祈願する。二月の十日、十五日、二十日に水を替え、晦日までチコレギ：余滓を麦田にまく。2) 南海岸地方の統宮では、二月一日に忠烈祠の井戸に飲食を供え、浄華水を汲み取り新瓢に入れ、新竹一本の先端を数片に分けて新瓢をつけ、地に立てる。浄華水の入った瓢の下には五色布片、五色糸、白紙等をかけ、冬栢、松、竹葉を付ける。主婦が浄穀を壺に入れて房で準備した五穀飯を供え、焼紙し祈願する。浄華水は二月の一日から十九日まで毎日替える。3) 京畿道安城と忠南の天安、大田では、二月一日に「麻姑おばあさん」が降りるとし、家族の年齢数と同じソンプジョン：松餅を食べて籠る。同月二十日に上天し、雨が降れば大豊の前兆という(宋 錫夏, 1960)。

上記の祭祀では、立竿を介して風の神に、飯と水が供えられる。それらは豊饒を祈願するためであるが、豊饒には風雨の順調が重要であることを、示している。ただし風にかかわるとはいえ、風神の観念は明瞭ではない。

### 立竿と祭祀の表現

この立竿は祭具であるのみならず、さらに立竿が用いられることにより、祭りの性格をも示すものとなっている。立竿と祭祀に関して、以下のように指

摘されている。

立竿は上元払暁に立てられ、二月朔日早暁に撤去される。長竿の上部に藁包を付けて弊紙、竹筐、青葉をさし、そこから藁根を表わす左網縄を垂らす、これは禾穀を象徴する。立竿では、豊年と鳥害予防を祈願する。南岸で行われる鳥報賽の場合、鳥を上元から二月朔に接待し、秋に啄穀の害を及ぼさないようにするが、効能はうすい。東岸南端での鳥禁忌では、鳥を立竿で遊ばせるが、鳥が過ぎ去らず、凶年とならないので、有力な信仰となる。立竿は鳥に関する祈豊観念であり、風神民俗と関連する。立竿は現在も忠南の唐津にみられ、ソウル以南に分布している。燕山朝(1494-1506)の李の『陰崖日記』、正宗朝(1776-1800)の柳得恭の『京都雜志』でも、現在と似ている。燕山朝では落ち穂を木に結んだが、正宗朝では禾黍稷粟等の五穀と棉花実を藁につけ、それを長竿に結んだ(宋 錫夏, 1960)

この立竿により、農耕での害鳥を遊ばせることが、可視的にも示され、祭の意味が明確にされた。前述のように、この祭祀では風雨の順調が祈願されると考えられるが、その祈願対象は具体的なものではない。これに対して、立竿という祭具が介在し、また鳥を遊ばせるとの意味づけされることにより、願意を明確に捉えられるようになったことが考えられる。

### ヨンドンハルマンと風神

これらの祭祀での祭神として、風神がある。風神は各地で「ヨンドン婆さん」、あるいはそれに類してよばれている。済州島では異なる伝承が残るものの、風神は老女神として、広範に伝えられている。

半島の嶺南では、霊童は李朝末に沿海に始まり、慶北の善山や尚州一帯に分布した、という説がある。ただし風神の由来は不明であり、歳時記などでも風神は記述にとどまる。『東国輿地勝覧卷之三十八済州牧風俗條子』では、神はヨンドンで、旧二月十四日に巫女が揺鈴とともに用いる竿を迎燈竿といった。ヨンドン風神信仰は、李朝末からではなく、原始信仰の一種と見られる。二月のヨンドン風は、ヨンドンハルマニが所管し、凶豊を予示するのだと信じられている。その神を擬人化し、娘と下降するときは娘の衣服が風に翻るのを自慢するため、その年は風が多く、嫁と下降するときにはその華麗な衣服を嫉妬するため、その年は多雨になるという。この信仰に対応して立竿形式が多くみられる。ヨンドン風神の神格・神性は明らかで、風と共に天にあるが、立



竿による祈願で降りてくる。またこの神は、風のようにその神体を分割でき、二月十日に祭りで毒気が消滅した三分の一が登天し、十五日にはまた三分の一が上天し、二十日には残りが上天し、残滓は麦畑で消滅する。ヨンドン風神は、生産に関する農漁荒神で、可分性の有毒妖気の集成体であり、個人や一所での崇神である（宋 錫夏，1960）。

風神を具体的に捉えることは困難であるが、上述のように一種の妖気として、観念されている。天から降りた気が次第に天に戻ることは、例えば供えられた水が減ることに示されると考えられるが、こうした気そのものを実感することは困難と考えられる。ここでヨンドン神は風とともに天にあるとされ、風とともに地に降り、また天に上るが、そこには立竿が介在する。さらに風神は、「ヨンドン婆さん」というかなり明確なイメージを伴う人格神とされている。

雨神は雨を生むとして、老若を問わず女神として受容されることが多い。ヨンドン婆さんとともに天から降りるのが娘なら風、また嫁なら雨がその年にもたらされると伝わる。すなわち風神のみならず雨神の要素ももつ風雨神が、ヨンドン婆さんと呼ばれることにより、明確な神格として伝わるようになったことが考えられる。

### 3. 風祭の由来と習合

#### 風神祭

高麗時代の主要祭祀に、八関会、燃灯会、祖霊祭、山川祭、祈雨祭がある。祖霊祭、山川祭と祈雨祭は新羅時代からの伝承であるが、八関会と燃灯会では巫仏が習合した。八関会は北方の狩猟牧畜民的であるのに対し、燃灯会は南方の農耕的な文化要素がある。燃灯 (yon-dung) は龍童 (yong-dong) と発音が近似し、燃灯仏は光明仏であるので、燃灯会は古来の龍神信仰や光明信仰にもとづいて受容された（柳 東植，1976）。

この燃灯会が行われたのは、896年には正月十四と十五日、1011年からは正月十五日あるいは二月十五日、1352年からは四月八日となった。正月十五日は、初満月、小正月で、この光の祭りは、四月の燃灯会に受け継がれる。新たな生産も意味したが、水を祭り、鳥を遊ばせる、立竿民俗に引き継がれ、その豊年祈願は、穏やかな海での安全・豊漁を祈願する風の祭祀に関連するので、ヨンドン祭に結びつ

いたと考えられる。

しかし、光の祭りは四月の燃灯会に変わるが、この光や火の要素は、一部が焼紙に残されており、また小正月の左義長やドンドン焼にも伝えられると考えられる。小正月に、鳥小屋や鳥追い行事が行われるのは、立竿民俗につながる事が考えられる。欧州でも冬至に光を祭るように、光や火は北方的要素であるが、それに対して南方的な水や稲の要素が伝わるのがヨンドン祭とも考えられる。なお京都上賀茂神社の二月二の子の日の燃灯祭は、十三から二十四日と祭日が近く、関連が考えられる。

#### 風神の由来

ヨンドン神は風神として観念されているが、また済州島では外来神とされ、半島でも天から下り上る神とされる。その抽象的な神格は、擬人化されて捉えられている。また済州島では、ヨンドン神は龍王神と一体化されて祭られる。これらは、風神が形成される過程によると考えられる。

その名もとの燃燈は、小正月の光の祭り、生産の祭りであり、多様な要素があった。それが燃燈会として四月に行われるようになると、残された祭りの要素として生産にかかわる、水や風、また禁忌としての鳥などの比重が高まったことが考えられる。それは半島部の農村でのヨンドンや立竿に象徴される。

神社の祭神にも主神と配神があり、普遍的な外来神や守護する土地神、祖先神など多くの神が祀られる。済州島のとくに海岸部では、海の神が祀られる。海女では沿岸の海中、漁民には沖合の海上が生産の場であり、そこを司る神を祭る必要があった。海の神の観念は、龍王や令監に示されると考えられるが、燃燈は生産とくに風にかかわるので、海を鎮めることから受容されるようになる。祭りにははじめ燃燈の様式が取り込まれるが、海との関わりの薄い鳥の要素が祭から少なくなった。一方ヨンドンクッで重要なシドリムは、農耕的要素の変化といわれるが、半島のヨンドン、立竿には種蒔きは記されていないので、済州島の海洋的な位置、すなわち南方からの影響も考えられる。

## VI おわりに

風の祭祀は全国各地にみられ、ここでは風鎮や五穀豊穰、また天下泰平や鎮魂を報賽、祈願して祭る。

またそこでは「風」という神格が祀られるが、それは風に顕れる天また天の意志であり、またときに風と一体化する水や雨にもおよぶ。風神信仰は本来普遍的とみられる一方、各地の複雑多様な祭祀は、祀られる地の風土や歴史による変容によると考えられる。風の祭祀の普遍性や地域性を明らかにするには、国内とは異なる風土や歴史の地との比較も必要であり、本論では国内に最近接の地として済州島での調査を行った。

すなわち、風の祭祀といわれる済州島のヨンドンクッを対象として、風の祭祀と風神信仰の調査を行った。それにはとくにチルモリダンヨンドンクッの送別祭を中心に現行の風の祭祀を調査し、またかつてのヨンドンクッや朝鮮半島南部でのヨンドンクッとの関係について調査した。これらの分析により、ヨンドンクッにおける風の祭祀および風神の意味を検討した。ヨンドンクッには周辺地域の影響や時代的な変容が大きい、その主要な特色は以下のとおりである。

1. チルモリダンのヨンドンクッ送別祭では、幡に14の神位が記されて吊るされるが、風神である霊登神は最も多く、次いで龍王神、さらに本郷神が祀られる。
2. この祭りは朝から夕にかけて行われ、午前中には多数の神々を招き、午後からは一体化した龍王神と霊登神が祭られ、その後、令監神を送って祭りが閉じられる。祭りの中心となって進めるのは、午前中は神房、午後は小巫、最後に衣装を替えた神房である。
3. 済州島各地のヨンドンクッは旧暦二月に行われ、祭りの内容も類似するが、行われるのは、沿岸地域の集落を主とし、参加者は女性が中心で、海女を生業としている。
4. 朝鮮半島南部にもヨンドンハルマネ、風神婆の伝承があり、旧暦二月のヨンドンクッでは、竿を立てて浄水が供えられる。立竿は禾を表し、鳥を遊ばせてその害を防ぎ、豊饒を祈願する。
5. ヨンドンの名は中国で旧正月に行われる燃燈に由来し、朝鮮半島でも正月十五日の火の祭りであったが、1011年からは二月十五日、1352年以降に四月八日に変更された。
6. ヨンドンクッが二月に変更されると、祭りの内容に火が低下する一方、祈豊の祭りとして、風や水の比重が高まり、済州島ではとくに風の祭祀と

なったと考えられる。ヨンドンクッでの立竿の様式は、済州島でも伝えられている。

7. 済州島では沿岸での漁業や潜水漁が重要な生業で龍王神が祀られ、風神信仰は祈豊観念を通じて海神信仰と一体化した。

上記のように済州島のヨンドンクッは、朝鮮半島さらに中国の祭祀に由来し、生産を通じて風の祭祀とともに海の祭祀でもある。また済州島の風の祭祀には、大陸や半島のみならず、南方の島嶼や東方の日本とも通じるものがあるため、以下に付記する。

およそ朝鮮では北方に王朝の起源を求め、南方に地上の楽園を想定して名山や霊山と結びつけたのに対し、例外的に済州島では海の彼方がかかわるという(伊藤亜人, 2003)。済州島での祭神が渡来神であり、種子がもたらされるが、これは南方海洋の信仰にもみられ、このことは、済州島での風の祭祀は、半島や大陸の影響のみでないことを示している。済州島は朝鮮半島が至近であるが、海流から南西諸島とも深く結びつく。

済州島は大陸よりも九州に近く、両者にみられる共通性は、風の祭祀の理解につながる。ヨンドンクッは祭日が変わったことにより、火に替わり風の要素が明瞭になったと推定されるが、類似の祭祀の祭日に変更されなかった日本では、風祭よりも火祭のままで伝わったと考えられる。すなわち小正月の左義長は、ドンドンとよばれることから燃燈につながり、また竿や鳥も祭りの要素である。祈豊として火祭りの要素が強いため、風の祭祀として日本では、夏季とくに二百十日に行われるようになったことが考えられる。

## 謝辞

本研究を進めるにあたり、済州大学校師範大学の玄丞垣教授に多くの御教示、また貴重な文献をご紹介いただきました。済州島での調査では、民俗自然史博物館、済州民俗博物館より多大なご協力をいただきました。富山大学人間発達科学部の孫珠熙准教授には、ハングルほかについてお教えいただきました。あわせて感謝いたします。

## 文献

- 秋葉 隆(1954)：『朝鮮民俗誌』六三書院，302p。  
秋葉 隆(1983a)：済州島に於ける蛇鬼の信仰一遮



- 歸文化圏の試みー, 秋葉 隆『韓国巫俗論集』, 301-311. (初出: 青丘學叢, 7, 1932年)
- 秋葉 隆 (1983b): 巨濟島の立竿民俗, 秋葉 隆『韓国巫俗論集』, 329-336. (初出: 朝鮮民俗, 1, 1933年)
- 濟州特別自治道・濟州文化芸術財団 (2011): 『濟州チルモリ道燃燈グッ』濟州特別自治道, 46p.
- 朝鮮総督府 (1931): 『朝鮮の年中行事』ソウル: 民俗苑, 219p.
- 藤沢衛彦 (1971): 『図説日本民俗学全集 4 子ども歳時記 年中行事編』高橋書店, 694p.
- 韓 丘庸著・姜 孝美画 (1997): 『朝鮮歳時の旅』東方出版, 188p.
- 洪 錫謨著・姜 在彦訳注 (1971): 東国歳時記. 姜 在彦訳注『朝鮮歳時記』平凡社, 1-170.
- 玄 容駿 (1969): 『濟州島の 영등굿』韓国民俗学, 1, 117-35.
- 玄 容駿 (1985): 『濟州島巫俗の研究』第一書房, 499p.
- 玄 容駿 (2002): 『濟州島 巫俗과 그 周邊』集文堂, 519p.
- 伊藤亜人 (2003): 珍島の「海割れ」. 東北学 (東北芸術工科大学 東北文化研究センター), 9, 249-261.
- 今村 鞆訳注 (1921): 朝鮮歳時記. 細井 肇編『朝鮮歳時記・廣寒樓記』京城: 自由討究社, 1-124. (※原典: 洪 錫謨『東国歳時記』他)
- 任 東権 (1969): 『朝鮮の民俗』岩崎美術社, 280p.
- 任 東権著, 熊谷 治・依田千百子訳 (1984): 『韓国の民俗と伝承』桜楓社, 482p.
- 泉 靖一 (1966): 『濟州島』東京大学出版会, 311p.
- 秦 聖麒 (1970): 『濟州島神堂과 堂神』韓国民俗学, 2, 91-114.
- 加藤 敬 (1993): 『巫神との饗宴』平河出版社, 183p.
- 菊地和博 (2003): 韓国濟州島「ヨンドン祭」研究序説. 東北学 (東北芸術工科大学 東北文化研究センター), 9, 223-239.
- 菊地和博 (2005): 平成15年度韓国濟州島ヨンドン祭調査報告. 東北芸術工科大学東北文化研究センター研究紀要, 4, 173-184.
- 高 雲基 (2007): 韓国の嶺東地域に於ける別神クツと城隍クツー江陵端午祭の性格究明に対する一試論. 古代学研究所紀要 (明治大学), 6, 37-46.
- 金 鎮順 (2003): 韓国の火田民ー江原道火田民たちの話. 東北学 (東北芸術工科大学 東北文化研究センター), 9, 275-284.
- 金 泰順 (2011): 濟州島の神堂とその周辺ー濟州チルモリ堂の事例からー. 濟州島研究, 3, 79-91.
- 金 泰順・古谷野 洋子・大橋 克巳他 (2009): 濟州島のヨンドンクッ. 比較民俗研究 (比較民俗研究会), 23, 161~197.
- 金 邁淳著・姜 在彦訳注 (1971): 洺陽歳時記. 姜 在彦訳注『朝鮮歳時記』平凡社, 171-236.
- 金 裕卿 (2011): シャーマンの儀式 濟州島のチルモリダン・ヨンドンクッ. 韓国の芸術と文化 (韓国国際交流財団), 18(2), 22~27.
- 喜多川守貞 (2001): 『近世風俗志(守貞謄稿)四』岩波書店, 416p.
- 古谷野洋子 (2009): 濟州島ヨンドンクッにみる来訪神儀礼の特徴. 濟州島研究, 1, 1-13.
- 李 惠燕 (2003): いくつもの濟州島ー濟州島への多角的アプローチ. 東北学 (東北芸術工科大学 東北文化研究センター), 9, 209-222.
- 李 賢英 (1988): 濟州島の気候. 立正大学日韓合同韓国濟州島學術調査団『韓国濟州島の地域研究』立正大学, 56-68.
- 李 錫浩 (1991): 『朝鮮歳時記』東文選, 577p. (初出: 洪錫謨1840頃『東国歳時記』, 金邁淳1819『洺陽歳時記』, 柳得恭1800頃『京都雜志』)
- 柘田一二 (1976a): 濟州島の地域性素描. 『柘田一二地理学論文集』弘詢社, 25-47. (初出: 地理学, 1934.11)
- 柘田一二 (1976b): 濟州島の畜産. 48-66. 『柘田一二地理学論文集』弘詢社, (初出: 大塚地理学論文集, 3, 1934.6, 濟州島に於ける畜産の地理学的研究)
- 柘田一二 (1976c): 濟州島海女. 67-85. 『柘田一二地理学論文集』弘詢社, (初出: 大塚地理学論文集, 2, 1933.8, 濟州島海女の地誌学的研究)
- 柘田一二 (1976d): 濟州島の集落. 120-146. 『柘田一二地理学論文集』弘詢社, (初出: 地理, 1939.1.4, 濟州島の聚楽の地誌学的研究 第1, 2報)
- 문 무병 (文 武秉) (2005): 『마람의 축제 칠머리당 영등굿』(風の祝祭 チルモリダン ヨンドンクッ), 303p.
- 中村 喬 (1988): 『中國の年中行事』平凡社, 301p.

- 中村 喬 (1993) : 『中國歳時史の研究』 朋友書店,  
631p.
- 中村裕一 (2009) : 『中国古代の年中行事 第一冊  
春』 汲古書院, 807p.
- 大石風世 (2008) : 韓国民俗学における「歳時風俗」  
の概念について－越境的民俗学史のために－. 総  
研大文化科学研究, 4, 31-55.
- 柳 東植 (1976) : 『朝鮮のシャーマニズム』 学生社,  
227p.
- 宋 錫夏 (1960) : 風神考. 『韓国民俗考』 日新社,  
91-100. (初出1934, 震檀時報, 1)
- 田上善夫 (2010) : 風の祭祀の由来と変容. 富山大  
学人間発達科学部紀要, 5 (1), 169-194.
- 田上善夫 (2012) : 風の祭祀の展開と景観. 富山大  
学人間発達科学部紀要, 6 (2), 243-264.
- 高野史男 (1996) : 『韓国濟州島』 中央公論社,  
207p.
- 漆原和子・勝又 浩 (2007) : 濟州島における石垣  
の屋敷囲. 法政大学文学部紀要, 55, 33-45.

(2013年 5月16日受付)

(2013年 7月10日受理)